

「うごきかた」は「都市の振り付け」を考える研究室。研究員の新庄とササキで活動。まちを歩き、場所に動かされる身体のありようを探る。

気になっていたこと

うごきかた研究室を始めるきっかけとなった景色があります。カフェの窓際の席から外を眺めたときに見える、人が行き交う姿です。私はそれを見ているのが好きで、よく眺めていました。普段私はダンスの作品をつくり、振り付けを考えたりしていますが、窓越しに見る風景もダンスを見ているように眺めていました。まちのなかで歩いたり、立ち止まったり、座ったり、おしゃべりをするという日常的な行為がダンスに見えてくることを面白く感じていました。

これをダンスと考えたとき、まちを歩き交う人々の動きの自由度について考えました。まちを歩くときは多くの場合、ある目的地があり、そこに行くまでの移動をしています。近代化されたまちでは道が舗装されていて、つくられた動線に沿って歩いていく必要があります。歩く人の動機や感情の他に外部の力として、こうした道路や建物が身体の動きに

大きく影響を及ぼしていることは、東京のような都市で暮らす人々には共有しやすいことではないでしょうか。外部の力によって「動かされている」という感覚は、気持ちの悪い感覚でした。そういった「気持ち悪さ」は、日常生活において意識しないようにしていますが、東京の狭い道での身体の振る舞いや道に引かれた線に対する反応など、身体感覚にコードとして根付いてしまっていることがいくつもあるように感じられました。

まちを歩き交う人々の姿は気持ち悪く感じられ、また美しくもあります。その外部の力を「振り付け」として、風景のなかから発見していくことはできないかと考えていました。そこで、「都市のなかで動かされている身体を発見していく」という「うごきかた研究室」を立ち上げることにしました。

「研究室」にするにあたって

動かしている主体と動かされている身体を見ることが私の興味の中核にあり、そこから派生して戯曲や楽譜にも興味をもっていました。楽譜というと音符や五線譜のイメージが強いですが、図形や言葉だけで構成されている楽譜もあり、指示書といったほうが近いものかもしれません。ダンスでも、あまり多くはありませんが「舞踏譜」というものがあります。これは音楽ほど体系ができておらず、さまざまな手法はあるものの実際にダンスを

つくる場ではあまり使われません。

「都市の振り付け」を考えることは、動きをつくるというより、隠れた動きやその規律を発見していくという掘り起こし作業に近いものをイメージしていたので、動きを詳細に捉える必要がありました。「動き」は指一本を上げるにしても複数の筋肉や骨が働き、複雑です。一方で、「言葉」は身体の一部だけを指すことが可能で、詳細に捉えるには動きそのものよりも、一度はつきりとしたものに置き換えるのがいいのではないかと。そうして「都市の振り付け」を「舞踏譜」にしてみるという大きな道筋を決めました。

ところで、研究室をつくる際に長島や佐藤(慎)に言われて印象に残っているのが、研究室の風通しをよくすることです。研究所内に研究室をつくと各々が閉じてしまうことも十分ありましたが、それはせずにお互いの意見交換や情報交換、人の行き来が可能なように、と。そこで、私は個人では「つくったものを見てもらう」ことを活動の基本としています。「研究室」という名前のもと、そうではないやりかたで進めていくことにしました。「都市の振り付け」を「舞踏譜」にするという目標はあったものの、「つくる」ことを最終目的に置ききらず、「調査をしていく」ことを主な活動内容として、うごきかた研究室の企画を考えていきました。

都市とは

「都市の振り付け」といっても、何から手をつけていいのかわからず、私と研究員のサキは、まちを歩いてみることから始めました。ここで扱う「都市」とは、ビルが建ち、地面が整備され、車道と歩道が分かれている近代的などこにもあるまちをイメージしていたため、どこか特定の場所を想定しているわけではありません。

しかし「どこにでもある」というイメージは共有がしづらく、どこでも可能なため、かえって場所を選ぶことが困難に思えてしまいました。かといって場所を特定しようとする場所の意味が加わってしまうため、それも憚られます。初めはどちらがいいのかわからなかったため、場所について検討をすることもありません。

まちを歩く

「都市」とは何なのか、という問題に対し、まち歩きの体験をすることで少しずつ見えてきたことがあります。うごきかた研究室では、どこか特定の都市Ⅱ場所を決めてしまわずに、さまざまな場所でうごきかたを見つけていくのがいいのではないかと。研究室が発足してから一年以上が経ち、ようやく見えた「都市」のイメージです。「都市」のうごきかたを調査するために、その土地がどのような場所で、どのようにつくられてきたかという

知識を頭に入れてから見る土地の見かたもありますが、場所に対する特別な希望がない以上、それを求めても出てこないという至極当たり前なことがわかっただけです。

千葉・松戸を研究員のホシに案内してもらおう、「案内人」とともにまち歩きを行った際のこと。その土地の記憶を聞き、おしゃべりをしながら歩いていくと、一つひとつのエピソードは色濃く記憶に残りますが、道やまちのスケール感などがあまり捉えられませんでした。物語と結びついた場所のことは覚えていますが、その道中のがすっぽり抜け落ちてしまったかのようなのです。「話を聞く」という態度は、まち歩きの体験を大きく変えるようでした。記憶のしかたが身体から言葉にシフトして、「まちを歩いた」という感覚から、「松戸を歩いた」という特定された場所の記憶になっていく。それはこの研究室で目指していることではないため、「案内人」のいるツアー形式のまち歩きは適していないようです。

では、うごきかた研究室において「都市の振り付け」とは何か。いくつかの場所を実際に歩いてみて、場所によって見られる動きが異なることを意識するようになりました。たとえば、北池袋周辺では玄関に植木鉢を置いている家が多く、それを見るために立ち止まる人がいたり、台東区は飲食店が多く、そこに吸い込まれるように人々が入っていきます。そうした歩いている途中で不意にそれってしまう行動や、その場所との関わりかた、居かたを含めて「都市の振り付け」として、この研究室では考えるようになりました。歩く個人

の身体感覚よりも、複数の人が同時に関わる「場所」について、身体のさまざまなありかたを探っていくことが、「都市の振り付け」を再発見する上で一番納得のいく視点かもしれません。

おわりに

研究所のなかにはいくつか研究室があり、私もササキも複数の研究室の活動をしていきます。また研究所以外にもやることがあり、割ける時間や体力はわずかなものです。互いの都合がつかなくなったり、忙しい時期がずれたりすると、進めるにはなかなか難しいものがあり、メールで希望だけを伝えても、なぜそう思っているのかを字面で汲み取るのは難しいことでした。逆に、たまに顔を合わせるとさくさくと進みます。直接会わなくともスカイプなどで会話をするだけで、互いに思っていること、問題点などがすぐに明らかになり、会う機会の少ない研究所の活動でも話すことは重要でした。

研究室で活動をする前までは、つくりながら試していくやりかたをしていて、そこでは都度選択することが必要でした。しかし調査となると裾野が広がっていくばかりで、さまざまな意見を聞いていくうちに、とりとめがなくなっていくきました。調査でも発表するには選択が必要ですが、それを避けてきたため、知ることばかりが膨大に広がっていったよ

うな印象もあります。

「つくりかたから考えていく」というこの研究所ならではの地道な模索は、「つくりたくない、見てもらわない」のではなくて、その手前の「話したり考えたりする」場だったように思えます。公園に行つて誰かと話したり、することはなくともただそこに行くことに近いかもしれません。